娘太平記操早引

初編

上

^13
4449
1

A13
4449
1

娘太平記操早引　巻首

何ぐ〜と呼ぶ儒先生。月に香りを出張をなして唐の孔孟の声色を陸ふ。構唐土に兼骨を屈らく。四角な文字の故事来歴を論じて。聴者更に耳我清さ涙。八百年の昔。合一貫三百の受料知〜唐人乃。字を閑地まるとふよう〜解〜とのぐらぬ故なるべ〜。却て義

古文節の熟歎場〻。鬼〻〻〻〻〻〻〻〻鄭樵が姑
を。鼻うちおとして涙を流し。乾舞妓狂言の
てふ。苦しゝ食と偏屋親爺も。[illegible]を規
まで是をも聞て暁〻易〻。同み祝〻速く解縛徑。
彼豆茎の呂よ苦く。毒多く消熱痛の。[illegible]
苦〻しとふ。作者も世てと上戸石。同〻ろる。[illegible]
読でも解せぬ論より証拠。文貴[illegible]の方

便乞夫の位物なまで。百日の説法河童の屁。佛と
言字の蜜觸とふ。竹三王元理るを[illegible]の世間を屁。
漢土鼻〻〻〻〻の冊〻〻〻〻所謂因縁故めるる
屁乗屁の足を彩る功能をもて。厚味を[illegible]
毒中の〻〻。面能着ても屁の如し。[illegible]
人情潤滑。位中も成れ金計の戯作と笑ふ
わく江戸〻〻。注ぐと思ふ法〻〻と勇む

ぞうりの首挿物を怖しる例なり。一文字の通り
おなぎるべし。切接文章の外野雀子の囀り
めづる俗おどろき聞採傍岡高懸の鼻高なる
故年貴ぶるべし。俗中君侯と賜ふ共も知
めづる通ぞう作菊の華瓣食う飲う酒足る
拜集の甚中でも恥をかきケコ五寿の揃
ぬ無體の杜撰人の譏ども絲瓜の皮面の字よ

星摘屑の。虫見屑連の大評判
願ひ奉るべし。如川そう惣の皮羽折
この俳諧を序する。

すまづの川 歌月庵の窓下に筆を採て

三二文舎 主人戯題

八百屋半六
髪結
鶏呑の傳吉

繁兵衛が妻
於千代

八百屋半六ぢ一子
繁兵衛
八百半の調市
半松
美婦お玉

盛衰榮枯娘太平記操早引上之巻

江戸　曲山人戯作

第一回

吾妻なる八百八丁八百萬青物鬻ぐ問屋株八百半ば見世さきに鯛市もさやなる果く調市ハ表の塵芥掃所打ちうち鯛湯より吸ひ来るハ鳥子の鰹の煮湯ちがりの浴衣ハ藍博多の平ぐけ〳〵そこそこ帯日よりの秋さへもとのき気ぬきなる浮奇なる婦人ハかな

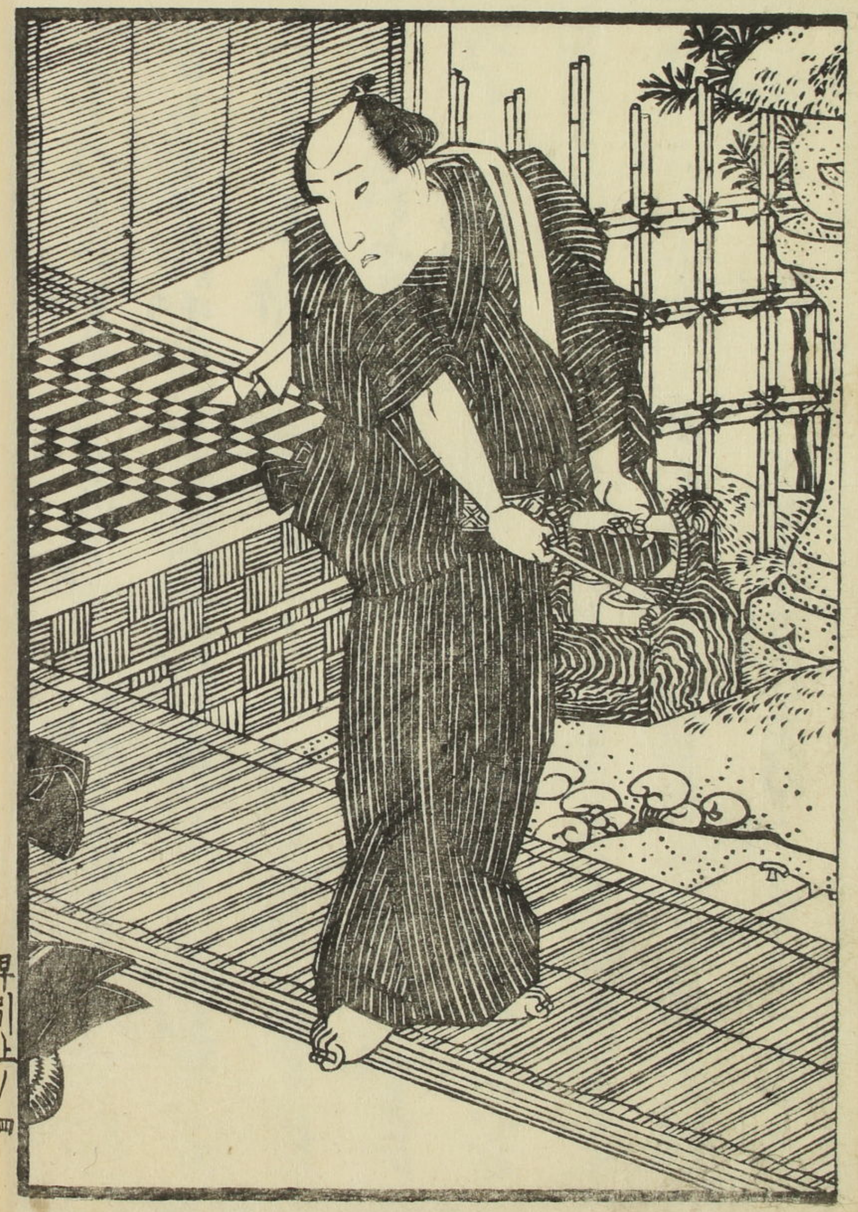
らぞぴをゐまさんゐるべしぐぐぐ

とァあの裸の姿を出来ごとやァどうも
とゐりゃうせんごらう「ざらァいなくてもこまること
てもどうゐるものうそをふひどく溜湯ごといつてもこまる
ら稼ぐの「そりやァあぜごごいまし溜湯ごけ奇妙ぢやァ
ございませんう涙あるうでもきめていがまごぐ好ゐりは云
はよしそもそも金魚鉢の中の新をつくるやうなもの
で何のざうさァございましたもの今この前をとゐり
ゐごうういへまし今湯ふぬるもうと息子さんの内

はござうごのヤレ云ふ風ごのうんのうめと二百ふ遠
ぶうて行くと十二三の娘とまるまりまし「ア二
ゐんとうふさういつくく虚をつく奴ごごうしてアノ娘ガ
そんうるをいふものうそりやァてめくが出放題ごらうコレ人
をいつるとあるごあるぞ「ヨヤくうそぢやァございませんどう
してもアーゴ虚をつきませうそんるくく虚うまる実うァノ娘
の如へ行くく聞くまてあげまいませう「エそべうがうめそんるる
を聞ふ行くうけゐるものうこまあんりべうくまあごうく

お千代はそんなようをいうぢやア強くで「ヲヽ」りんはさうぢうけ
そんなようがお千代さんは考えてゝそこを大きく考りのもう
ちとこんごりんはあんまり口をきくぬそお三どんは好きさ
ようをさうだりとこまきてくぬさドレ豆腐やく行くとうあの
湯でもゝつく来やうトいちもくさんはあんべえ繁うあるハ口ぐう
けくやく
内へさしまバ姐のおちよハ奥より出てるやきもぢこあいきやう
づきゝ高ぐやの高くバ「ヲヽ」ちやうてうきいまゝ〻ろさだが暑
うこざりまゝ〻ちうアハおちよぢんがあるこのお飯りをお估

ようもつくおいやきこいまはよ「ヲヽ」さうう大うと紀まこうへぢもいの
ぢちうコウおお千代おまこハもぢはお服をこぢちうの脳こをゝく
おのくくんは「ヲヽ」おは指こもいてくいきまゝこ「ヲヽ」ちうくどう
しそもおこうろはは早く別まてこんぢうは帯考こく奇ぢよく
つくのへ押付小児ぢできうと恵おックアはるのぢゼ「ヲヽ」ちやいはぢでお
ぢいまはよそんようぢうりそまでぢアノようんぢこぢへませう
子ようこと子供でもぢきゝこうはこのやうみ着ハ
一倍ようやく年ぢよりうませうと思ハまはよ「ヲヽ」さうさまでぢう



繁昌記
ちよと
情深を
話説

今のうち精出しておかさぬ化粧をするのハ千代までも私
のやうなものハいくつになつても仕粧ぞいてゐませんゝ田
でも作る方がましぐござりませうヲホヽヽ（ヘンかつうい酒屋
の蒲焼ど遠へ目の当中宮ちつと拡を切と漬へでも落
るぐらうトむどにまぶりかいちよう人麦飯の方へ四く入ちぶひて
出るる人半六様をさーのぞき一とりやいち千代ありや朔
冷のうち二さ観音さ夏へ来つくるうち切をようう寿を付て
ゝりまけ六ときに四方六千日ぐらゝ後ゆへさど人ぐ出るで

あらうう大うさ鰯三尾も夕方ゝ来行ちぐらうゝ
しも一面ふ行ぐよのいちくく焼鮫でもつんてきまと
をあるこぐふか千代ハ八ハイをくハみぐこうござりまぐ若旦
那さんがかいやぐとおつしやでぐぐいませう「ぐんのゝ」已ゲ嫁
でやめるぐやるのぐ容ゑとこのひまを来ぐとこのひ、もゝ、のやうみ者
を連ゝ歩行くゝ又やまこをまハくゝ又るのぐもをつくく
うゝやあゝぐるゝうねぢやハ又ゝゝぐりやそんうう行くく来やう
トよあをいろう赤ひぐろ信ひまありぐうりき。蕊ゲ身を助る
おちよハおとを又おつて又の口ひまをいりれる

又ハ天性の美身で人を惑ひ今妃后と渾名せらるるまでく
三絃の指南をして世をくらし、ちと唄ふて美人あり年ハ
二八の花の蕾ひらくる風情あり、くつろぐ目のとゞまるを
くやバ達磨も座禅の襟を崩し、紐をゆるくく踊り狂ひん
唇のもとの笑靨ゆいるる鬼でも閻王でも気目づらひく渾の
破るゝやどふ又とまるん見のとで駄〻口元ごろりと人を
とびくくとハ見代娘をいるるべ〻、ちゐひとりの母親あり年
六十ふちくく名を捨てちのお無と唄ひたの性いと欲深

く又食りく飽ことを考ふ為ふる人ゆハとびへつくふる
とゝき乞食が物をとゝふでとく人中長屋の長刺ゆく
の老婆ゆりさまバかゆ玉ハ三絃を教ゆる娘子どりの面倒
ゆるをきくひ息子店者の融通よき反家完のはゆけ紙
歌〻俳諧の壮丈ゆきをゆ[illegible]とむ人ゆうぬ
びをゆきりのハゆをバ弾ことせんの合のゆゆ稽ゆく
きゆふ調ゆを合ををゆゆ返ゆきと関ゆ乎ゆく稽古ハ
余所ゆのゆけでゆ〻日歌をゆくまで張ゆくる郷漢の面の

皮の厚きことハいとゞ撥皮もかよのぶべきお玉ハこゝをゆ
るすとてこくいろやど風流男ありとも眼れ
ふかでして実を
一遍の恋ゆゑ会次第なる落情ハ母のめづりの根
性なるべしとて美人ゆ生まれしものゝうちかのまと接ぎくまあ
くまをしたゝ交ふことなるく二十ばかりなる素よりして男ゆ肌を
交ふこともいまだ実ゆるものなくものゆゑ
なる者ゆ男ゆ逢ぎりしべ世ふよ死をのとハうきもの

ぞこと人ゆもうこりゆのうちゆも浄くこゝを碧ひのうゞ
かの八百年の命をもゆをるゆ比ようかのハそあくまる変
くゆゆをうのまゆ一月ゆとゞ知せ知のこゆを文ゆくか
こりゆどゞけるゞ撃ゆ文情のたハよくあきらあて
晴くゝ神ごのとより陰制得貴なるハ浄意なゆゆ
びくるゞくゞ嫌ゆかゆ千代と交り浄くゆゆゞ臨まり死
中なるハ姿ハゆ玉ゆ劣ることもきくく永年のるゆ死ゆ社
ゆゆくゝゆ玉ゆ知をつゞくく送りしゞ知も被きて不

せをとの後ゆく逆せつゝやどふか玉八こゝふ星をを見ひ
あつまこのく後ゆき人と娘こゝをとも後てこのひとバかひ
あきこゝめこゝをとんとまをとも弥増ふるやまをとをとも日くふ
ちろをくすめけり後異とらくど揚ぐこゝ紀星の暑さを去のが
んとい玉八極例の燭ふ出川今高ゆくをゆくとこゝ後をごろ
つこひ花のゆけうちくをもちものゆ「おツファあの高ぐつこのんぐが
あこうをあ高こうぐ
けつく紀まきゆの四万六千日ごろけチトいつふか玉ぐ毋起ハ
こうそゆこふくひ高ひくゆ後桃をあこひこうぐ「ヲくゆんふ

きうぐこのう七月の十日きうくもくゝ暑のゆ八ゆつい
けまど工八高ハこうくさぐ毋ゆ人も出ぐこうよ「ヲこうきチへ
ふいくも紀で行こんんごあこくく行のちやァ高ぐゆの年ど
ノウゆこうファ「きうよこの暑さぐあこくく行ちやァ後つこう
面くこうファ四ファノ出店の高きんゆんぐど行きうゆんゆんぐう
「ふやくくあの人とこうこ年ぐ店着でもあんゆゆこ人と
ふくゆのファあこやァ高ゆのよヨヤ後こう表の格ゆくこう紀つくこ居
こよ後ぐくのぐくのハ八きんクヨヤハきんでもゆのヲ後きんぐ

コウのぞ
聖きやァ四のんごとちくハ女湯ぢやァ
おらァ湯やごと、あつてとんご門遠くごろけァ〳〵おごさん今
日ハめつぽう暑いもの「きさうも
てごァそろく居ぢとよろく吹ーなナ「今ハ佛さん辻番の釈
仁ぐ垂とらのよ「ちげく絵へよくらふ巻のトおてのうちしをあけてきらハ
おらあのうのまりの髪結どんなもでも物春の佛吉武
地ハひさくぬるとそえその言葉まごもへくこうちろん三
こせんの弟子共あるび只毎日へり来りてむご口だりて

早引上ノ九

ゆまとそえうり「お生へくハ俗ら四方六千日ごのかいそぐ
きうるものご「佛吉「ゆんの翔ごくそうけく巻付さのの墨中
ゆやァちろと体まへちぢやァつぐ巻へよごつろうて「きうる鋼ッ
くうづけく巻ちとこの暑さぢやァごろうもる巻さのう大
くと繪ごふりくまごちうあんまりつあて巻のハ毒ごとるヨホ
「佛「アくこうつァおくろく鋼ッくう巻付さの繪ごくろくく
もるのとらつくう新ごくきのくうくう仕事ニァ思ハまへでおり
くうくうよ彼ゆごと、あつくく、ウおごさん「ホくくちんホさうくこの

とく善ようちとつくものハちとこいこのもトがりの極
でおろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ極へよかゝ〳〵コウ仏さんもめくけるなど
刺刀ハまゞ出ぬ〳〵ろ出ぬ〳〵ろ抜く〳〵来く〳〵ろんなナ仏さうごろけ
さろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ出て〳〵豪傑ハ切るのをのけく〳〵来く後ハ抜く〳〵来
やう仏いつでもとんなるなぞろ〳〵ろ〳〵いつく〳〵今度ハとまるとさろ
なへよ仏大丈夫ごろうコまをやア〳〵極へコウハちおさんもめくど
うゞし〳〵ろでゞぶ新の久ゞろのゞぜ六へろと兵病ゞやア極へろ
仏ちげへ〳〵ろんみこの位ハちろと若旁なるゞゞわるせへろなん

早引上ノ十

ごろふさろごなろなへよとをでろうお服も極つろ修ろを
ハな仏ウふゞ出ぬ〳〵何をてをゞるろをゞでる又六妹ハ服アろく
ゞろうろ仏ろ〳〵ろゞようてもお人を信州者ゞやアあるゞゞ〳〵コウ
仏さんハ人の知ハをろやナゞろこんちろ〳〵めろ〳〵いゞのコウ
なんと金ゞゞでもいろなへハどろ〳〵てろ〳〵ろのう仏ハテナ
どんな理屈ろ来ろ極へゞ今時の代世裏ハ金ゞゞで生来なへと
いふなゞなるものろなノウもゞさんろんハさうきこの子ゞ又何を
いろうまろ極へなゞろう地獄のきて金次郎さの仏なんの

おっかあハ祝ものをするのごそんなるもぢやアないよ「うんのるす
さうぞうとうく極へ〳〵わんわ映の仕うけをするのござ芽やへ
ひろ〳〵くるのをさうぞう寄まさいつアちもとうれて来るとう
音を付く〳〵くんな仲さんもめへもの吟てもいとのまをぎのきんでふく
「そんなるおっかあかまへその序わアハ三味線ゞ出来てこうぜて来く
かくまる「すさうごうけのうアハ張番ものう出来てこうくし
いやごのうまとふあの三味やハぢるのよ外ようアハ上なごうく
ものいつ張番わ出てもつい〳〵こうまへく撥へくなて御ゞ

極へ僕ゞわ行 えんびわ豆日和ごとりいのまへつまのころ
んごのとうく〳〵らぶあるもッちやアもそのくせも亜能
ハ言葉ご「いつ中そのうり外ご張番ごよりハ言へるよう
皮のそるまとのもへのご奇妙ごよ「うんのかめへハ内わぢうり
ぬるういごかいアもつう宜アもへ彼所の巻を通る度毎
わ僕ゞをまるのも恰好ごとりのうう三度わ一度ハまりをを
しくあまとの巻を通う極へやうわまるるるだるくしい
ゆと残を中元見を搭子本わしもを差ぶ殉下弦の歯

ぞよつぞどへつとまつよアハ〜どりやそんなら〜ゑく〜来やうト
なるべくはまをまりしかはくらけ
ろうてどらろくおりてくまる
ようやどはまめどのう
なるく独よそまたさうとと今らいつとうのもつと待る大概おめく
の御の中ハきるぞともあ知の外ど大らと八百屋の鳥ようさん
のるくどらうトいつまてまもの
ぶのうどどぞでそうでもあつとく八テをとろ物呑の徳吉
どアみどんなるみても位ぞんぞ徳くとらとアとぞんるまるぞ

アノ彩どらうあらうどうからやナ嬉さんどらう「アアアそんな
ものさコウちんなるをいとらやるくいやうどぞ子今ちどコとと
ーやアゆくこの好このとまつてこるハもおえるんどぶるッうう
どういとこてろアノまきんとろ整さんとろをろる度毎
ふどうも彩もはぐらいるまのやどまつる寄ふまつて食
もちんまもふくうるくまつて一遍でもいくうのこけを赤
あけくらはこと思はちんでもまきろ鳥くもうの人ふ
ちんどあつうなきろてるいまるせどゆうう嬉てる覚

てもけしからぬやァ婆さんのるすを狙ひつゝ〳〵ぬく袋方のるす
をどう〳〵いつゝ〳〵ちんでもうとてやァだゝ〳〵いるすゝぐ魅四
でもーやァまるいうと、もものを上「フウ」強奇ふ強もをを四での
きろい道成寺の清姫と来くゐる大蛇ふ成ちやァいうものくせ
「アレサ」戦慄ぢやァ白いよ支ぐゝるまゝの矢の底をきのこ上
せんもを立ちくもうふくぬそもゝまゝの来る時ハ
いつでも外の着ぐ来くぬるゝ〳〵ぐ来ゝいひきるん
ぐゝとつてけるすぐうりハえぐ実の軽でもおッァゆハ去

生ぐうひとり奇をそんでゆゝるこりやァ私ぐ一生の
お邪ひぐゝぐうぐ出来るまでも骨をおゝく代を叶
つくゝ生ぐ白いうそのうりゆやァ骨おり代もゝまゝがいゝ通りふ
来るゝ〳〵ぐうゝ袋方ハ白いゝ「そりやァ」ぎのぐんゝ乳次ぐで
どうゝ立支ぐ強でも生けまぐ代る強も来ゝぐやァ強くゝ
「さうさ」さんの如のゝ三どんゆゝうくゝ仏易くゝ来くる
ぐゝりをゝくく強ハゝぐけくゝのくゝ元まで討もきくゝぐふ
返さまてゝぐあんまり強ゝぐやァ白いゝ生文強ゝぐの

男ハ男ぶり腕く見ハ吉ゝ事ゝとゝのハゝやぶ事ゝ
ろ
ゝ子ゝ子ゝ見ゝ子ゝ子ゝ子ゝの国界とゝやゝぶゝろゝこゝ事ゝをゝゝと
自性のゝゝゝぶゝ方ゝこの人ゝゝゝ袖縷をゝゝゝこゝゝゝゝゝ
くゝぶゝゝゝゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
く附録をゝるのゝゝくくのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぢやアゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

髪結の傳吉
お玉を繋ぎ
情婦ん事を誌

いと好きがあるだけどうもあんべえしきだりいちやアあるく
「サアそこでろ孫右内義さんのあるのをきりて捨ても何も
そのお千代さんを退出くるまでご送入らうとらかきだ
やアあり」男ひとんだりこの病ひとく一度でも二度で
も帯紙とのくるとりとかをはしあひだぐらいまで
おもりろい美を結んだそのあとかはうとうだしてきく
たろだも何も祝ことぎひろ付く添逆やうとらかきだやア
あるどうでわるのある着ふきちけるえいかもうあいろ

早引上ノ十六

わいあ知狗のつくと上達をぶりきげくもとふらのるだョ
「フウそこちやアあきふ清どりきたが早えるあるあやアいろ
もくぜいづまえ久意とのふりのあ者ゆだふしく極くちやアできもく
もんだ「ヲヤく伝さんもんのるくる早えふいるるいてある
あるろちんあふまくをとのこやアえるるいよどうろいて丈をぶ
しくおくまる「くるろふいてもあるけまだ縫芝えるみやらう
といろちやアいたもづろいのうをきふアノ書さんも佐ぶん故
湯をきこのだ根ゲきまるくぬるいまでだろう大体ちやア

いろ〳〵ハテどうゐ〳〵思案がトうぐをうんでそをまくちゐと
思ひつゐさすがあるコウいるまさんト小ごゑ小ゐり けふ名〳〵繁さん
とゐちゐさんと解まるさるへ切とつゐくきをくをしてゐるそゐ
こぐこのつぐどうゐ種ふゐりきうるゐんぐぜ「ヲヤきうゐくをま
ちやア大ゐさ紙ごらうゐ「ゐもちろんさの解ゐハ発ゐゐ焼筋へ
でもまゐる張向ごとのふゐつさッけ「フウをまハ千夜寿姉ぐゐ子
一紙ふゐ切ゐうゐ法ハ書まゐのゐ一紙ふさへ切まぐどうゐ切ゐ去
ゐうぐあゐゐゐちゐ〳〵外ふ連ハゐゐく「きゐよ外あやア連ハ

紙へゐうをぐゐけゐウト切ぐゐゐとゐちよさんぐ一紙ぐゐ〳〵彼
紙の且形も切ゐ〳〵と奥吉も山へ切ゐゐゐけぐをゐくある
寿〳〵切〳〵切智力とふゐるゐぐある「ヲヤ〳〵をりやアマアどんな
ゐゐ〳〵切智力とハさゐくいゐくお笑せるんのゐゐ「ヲ外の
ゐゐても紙へがいゐ人も知居るアノ章吉の奥八の「アアノ父の奥の
雁啖の奥八さん〳〵「きうき〳〵雁啖の奥八がの一紙ふ切と
いふゐゐ〳〵彼奴をさのんぐ〳〵ぐらうアノ男もぐるぐん
格別ふ欲張居ゐゐ〳〵金次ぐでさゐ〳〵ぐらうヨ「ヲヤ〳〵

さうく〳〵そんなる〻豆八さんを味方おつけく諸ぶつけくこゝまう
う極〳〵をまだいく〳〵そんなる〻ちよろと独く切くよれで来まう
おそまだやア特寄妙ごと〳〵そんなる〻出勿労なる〻〳〵をまだが
あのなんぐらうのおッかアゆやア隠寄ぐらう〳〵さうさ出来あと切
なる〻〳〵なるいがマアろうをりくと隠して垂う上〳〵ウをんなる〻
切く茶ポトをんぐらひをりくまを〳〵片づけ〳〵すくさんお独く
ゆく

盛衰栄枯 娘太平記操早引 上之巻終